「盂蘭盆会（うらぼんえ）」

令和四年七月二十九日（金）
五泉市永谷寺　吉原東玄　合掌

回り道こそ供養

仏教はもともと先祖供養をそれほど強く勧めているわけでははなく、インドでの「彼岸」あるいは「到彼岸」という言葉も、必ずしも先祖供養とは結び付いていないようです。それに対し盂蘭盆会の方は、目連尊者というお釈迦さまのお弟子が、餓鬼の世界に堕ちた亡き母を助けようとする物語に基づいています。

目連尊者（釈尊十大弟子、モッガラーナ）の母は生涯他人を思いやることなく、もの惜しみの気持ちが強かったため、死後にその罪で餓鬼の世界へ堕ちてしまいました。目連尊者はそれを非常に悲しみ、亡き母を救おうと神通力で食べ物や飲み物を与えようとするのですが、かえって母を苦しめる結果となってしまいます。そこで目連尊者はお釈迦さまに相談したところ、お釈迦さまは「自分の母だけを救おうとするのではなく、大勢の僧侶に供養をすることで、広く餓鬼の世界に堕ちた人々を救いなさい」と諭されたのです。

盂蘭盆会は、先祖供養とまったく関係が無いわけではありません。ただし実際にこの物語を読むと、現在行われているような先祖供養とはずいぶん違うことに気づきます。そもそも目連尊者の「母を救うにはどうすればよろしいのでしょう？」との質問に対し、お釈迦さまが与えられた答えとは「大勢の僧侶たちに供養をしなさい」ということでした。決して餓鬼の世界に堕ちた母親に、直接食べ物や飲み物を供養することではなかったのです。

今の日本の先祖供養を見ますと、「他人の先祖のことはさておき、自分の先祖の供養だけは」という風潮が目立ちます。それに比べるとお釈迦さまの教えは、一見回り道のようですが、輪廻についての深いお考えに基づいており、実に的確で行き届いたものといえるでしょう。お釈迦さまの慈悲がどれほど深く、またその教えに「布施の精神」が活きているかがよくわかります。

願わくは此の功徳を以て普く一切に及ぼし、
我等と衆生と皆共に仏道を成ぜんことを

（願うことは、この読経や行の功徳を、如来・菩薩・諸天・善神・鬼神・亡者・諸精霊・衆生の全てに手向け、私達全ての生命と、皆が共に仏の道を成就しますように、と祈ります）

このご飯をいただけた喜びを、あらゆるものと分かち合います。